

工十30-82

平井則正著
小田深藏校

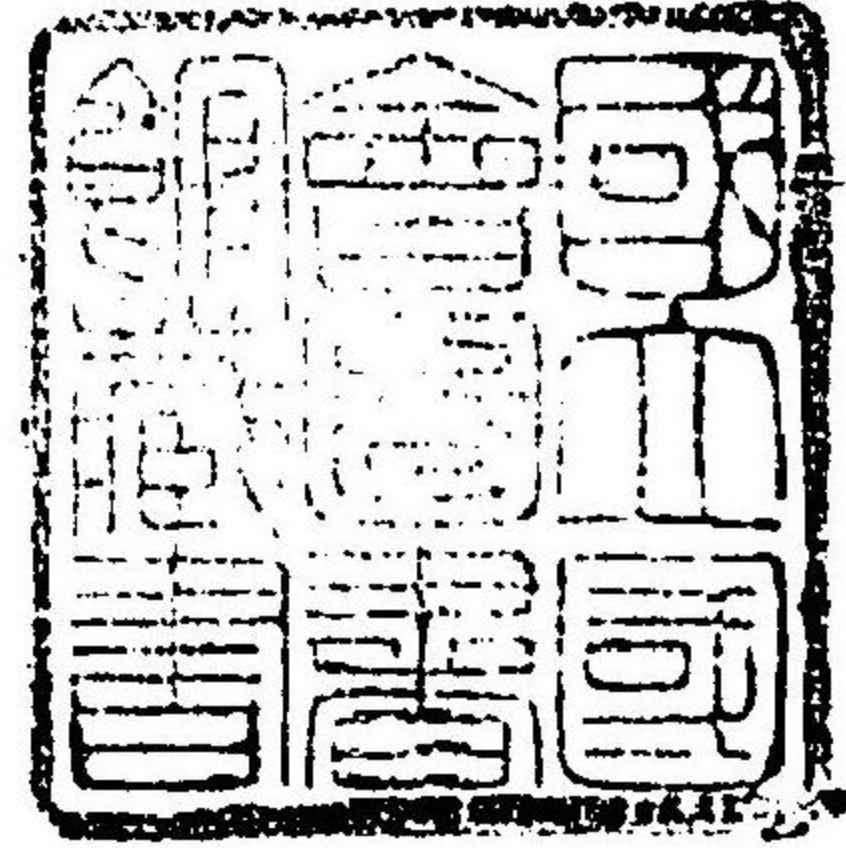
辭
礎

全

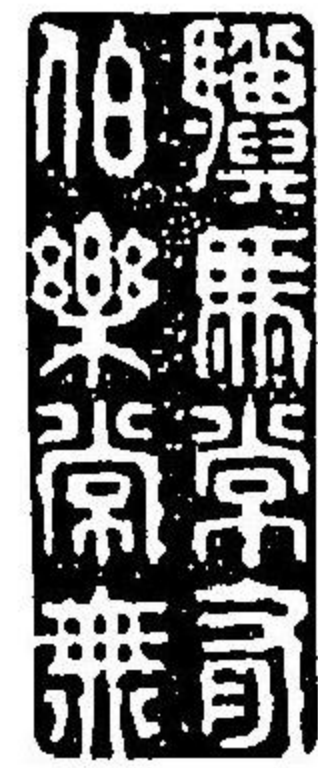
八方齋藏版



811.1 H475₂



337327



辭礎序論

造化大主の創制しぬる萬物の中其の貴重なる物を人と云ふ而して其の貴重とせる者ハ天の至神至靈を稟受し靈妙智識を作用せる唯言語の活用にあり此類に由りて萬國の交通自在を得諸學の教導習脩を得且造化の功用を測り有形無形の理を究めむも亦皆言語の活用に非ざるハなしされハ首として言語の起原を正審し得るを最大第一の勉めとせざるヘからせさてむかし余が遠祖錄足日ヘらく天地を以て書籍となせとあり此言の宜さ夫れ史類あるものハ和史漢書洋籍を問はせ皆人その道を知らむに便ある標目

にして徒に参考に供しとるものと看做せに過ぎざるのみ
史類未師の職を有たせ將その任に充てざるもの、如し然
るに理學家の視力を質物に及ぼし其の限る所に止まり其
の心をして之れに安むせしむ又國語家の古書韻類に依り
古人の説く所に就き之れに已れか思想を加へて以て言語
の義理を得たりとし率韻鏡開合喉唇顎舌齶等の説を爲し
誤りたるのみ譬へん人をひと、云ひ馬を卯まど云ふ斯の
如き類其の稱呼の素因に果して何の義理ありて然らしむ
るや若し之れを問は、恐らくは渺茫に歸せむ又今の世上
の説の一語を解かむも專視力を史類に曝し汗牛充棟の説
を積みて以て之れを盾とし徒に競争の証とせるに過ぎさ
るのみにして一定の規矩を能く明釋しぬるは地を拂ひて

有ることなし然れは則大古の人民に何に依りて言語をな
せしや蓋し其の本有らむその本究め難しと雖其の國土に
人類の生るに従ひて天より夫れ、自然に其の語を爲さ
しむるなり夫れ禽獸に自其の聲を發して犬の犬の聲色を
爲し猫の猫の聲色を爲して其の用を遂ぐるなり乃人の人
の音聲を發して其の功を爲せ豈に五十音を待ちて言語を
爲すに有らむや人の禽獸に異なる所以は五音を清亮に發
せるに依る其の聲色多般に涉ると雖其の響く所に決して
五音の外に出でざるなり禽獸に然らざる其の聲只一音二音
に止りて聲質正しからざるなり則人類は五音を以て言語
の基址とし各國各自の言詞を爲し推論談話悉如意ならさ
るなし又文字を製し辭を頁はせ音訓と名つけ之れを假り

て以て言語の用を助く或は書籍を編みて以て之れを永遠に傳ふ而して本邦之れを稱して假名と云ふ則其の文字を假借して音訓を負はせ辭に代用し以て百般の事を記せしむふ義なり又萬國の文字と稱せるものも皆其の國の言詞を負はせ而してその代用の標目に假借せるものに非ざるはなし特に本邦の文字のみを指して假名と云ふは固より非なり又假名の名義の誤解にして其の本末を誤るものなり彼の五十字は吉備眞備之れを作り四十七字は空海之れを作れりといふ是れ古來の傳説にして悉信を置き難しと雖其れ或は然らむ而して其の由りて起る所悉曇漢音吳音の類多く之れか素因を爲せり夫れ西土文物東漸の初めは輕島の明の官の御字に在りぬと謂ふ然れども是れに先た

ちて別に文字有りしならむ所謂神代字是れなり日本紀に曰はく漢字を以て神代字の傍に填むと而して其の神代字は後世に傳らる古今の書類に依り神代字と名つけたるもの數跡を見るに其の字跡甚梵字に似たり恐らくは後人の假托に出てるものかはた眞純の神代字なるか今茲に其の眞偽を知るに由なし彼の獸蹄鳥跡以て結繩の政に代ふは古書之れを証せ我國特に文字無きを得むや唯萬國字跡同一に歸せざるのみ夫れ古辭にあやといふは是れ全く文字の名にして其の果して有りしを証するに足るなり今予か述ふる文字の訓義は太古之れを用ひしや否やに至りては其の正確を保つ能はずと雖未其の訓義の何様たるを知る可からず故に今此の訓義を以て太古の文字の訓義と爲

そも從來世人の訓義なし云々と云ふに比へあはれ則之れに
 勝れること遠からむ世人妄りに其の人を以て其の言を信
 し虚説雷同して却りて其の眞を失ふ者多し是れ世の通患
 なり且予が訓義の組織を原ねつるは既に四十餘年の前征
 夷府に仕へたりし時に始めたり其の初め國語家中條信禮
 に從ひて其の蘊を叩きしに未其の確説を得ざりき然れど
 も其の間頗覺る所ありぬ夫れ世の人單に有形の理に講せ
 ると雖無形の理に至りては未之れを究むること能はざる
 に由るなり予本業醫なり醫術の脚氣治法に於ける衆醫之
 れを難しとせ脚氣病の原因は至幽至微にして大に無形の
 理に關せ故に其の原因を知るは甚難し其れ頻年其の病に
 斃れぬる者鮮からざる所以あり嗚呼哀まざる可けむや予

此の患ひに耐へ難かりしより苦心の盡せ所專上下の神祇
 を禱ること既に年久し竟に長くも幽傳を得其の覺る所鮮
 からせ即無形の理の蘊奥を究む凡無形の理は廣く且遠し
 是れより幽微なるはなしその最究め難き所以あり然れど
 も之れを知るに道あり予茲に見あり抑音聲といふもの
 無形有形の間にありて無より有に傳へ幽より顯に傳へて
 無形を知る媒始を爲せ故に音聲の理を究めて精神活運の
 理を知り之れに因りて始めて脚氣病の原因を知りぬるを
 もて既に其の説を世上に布きぬ即發明脚氣原因論是れな
 り又五音の眞理を知り然る後國字の訓義を知りぬるもの
 あり然れども是れ決して太古の訓義と謂ふに非を更に予
 が新に發明したる國字音訓兩義の説なり今此の兩義を以

て從來國辭の失義をして將に改良せしめむと欲せ天下具
 眼の士予か志を憫み此の説を賛成し之れを翫味せし則國
 辭の淵源を知り古典を了解せるに固よりのことにして且
 脚氣の原因を究め横天を救濟せるも亦難からし然らば則
 予か説も亦徒勞に属せざるへし夫れ人身發音の口相呼象
 の二事能く其の聲色を異にせ其の口相呼象を起さるもの
 に人身全軀の体力なり其の体力を起さる者は是れ精神なり
 精神に体力を起し体力に口相呼象を起して音律の本たり
 而して口相呼象に能く音訓を爲し音訓に能く辭を爲さ而
 して体力精神に本無形なり無形の理を究めて音律の本を
 究め音律の本を究めて初めて辭の活用を知り以て音訓兩
 義の組織を成せ此れに由りて之れを觀れに萬國の音聲と

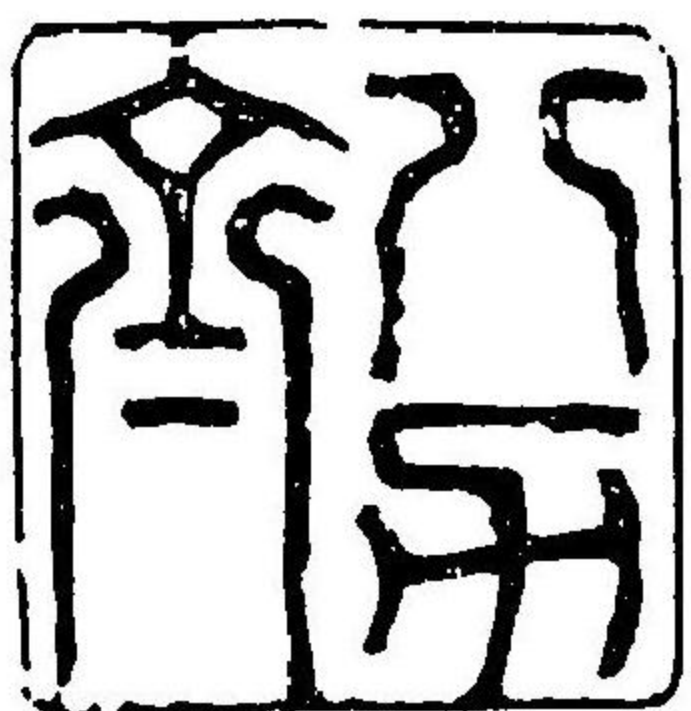
云ふものハ皆造化の然らしむる所に於て特に人類に賦與
 するに五音の正亮なるをもてせるに幸福と謂はざる可け
 むや爰に於きて天造の辭礎及ひ釋義を作りぬ

明治己丑の秋の日

帝國日本東京

左馬督藤原
保昌之後胤

八力齋 平井則正識



辭
礎
目
録

第
一
章

發
語

第
二
章

字
原
の
解
法
及
ひ
五
十
字
の
組
織

第
三
章

ゆ
え
の
位
置

第
四
章

五
十
字
の
音
の
組
織

第
五
章

五
十
字
の
訓
の
組
織

第
六
章

辭原

第七章

反切に用ふる普通の五十音

第八章

跳音

第九章

言靈及ひ四聲

目錄終

辭 礎

八力齋 平井則正 著

帝國 日本東京

愛 厓 小田深藏 校

第一章 發語

世の人の發語を論ずるにあ音を本とせざるものありう音を
 本とせざるものありされどもこれゆその眞理を知りてその
 説を確定せたるにあらせ今この別をあきらかにせむ人の
 言語を發せむとせざるや必まつ精神動きて人躰一軀の力を
 起し口内に注ぎて口相の變動を起しこれに因りて衆聲を

二
顯きものなりさてそのあ音を發する口相に其の口大に動
き開きて其の内部をあらはせ呼氣之れに乗して動き出つ
る象をあらはせその精神すへて勇氣をもて立つ也爲に呼
氣の勢力甚強しされにこれを他の聲の呼氣に比ふれにそ
の動き出つる勢ひ極めて著しこれ即發音の始めにして譬
へに大氣の動きて始めて風象を生し海水の動きて始めて
波瀾を起せ如し皆自然の理なり故に今發語の首を定むる
に當りてあ音をもてその本をなれ何となれに發音の
本の動力にあれにたりされともあ音に衆聲を造り成す大
もとにあらざるなり衆聲を造り成す大もとに全くう音
にありさてう音を發せる口相に唇圍大に合ひて呼氣も亦
合ひ出つる象なりこれに精神親和し合力を起して發せる

ものなる故にその聲色濃重にして複雑抱合の性質を保て
ることを知るに足れりさてその合力極りて分力を成せに
理勢の然らしむる所にしてくさくさの音聲にみなこれよ
り分れ出つるなりこれをもてみるときはあ音とう音とに
あめつちのけちめなり考かるをう音をあ音の上に附して
強ひてあ音を衆聲の祖とせるに非ざるあ音を發するにう音
を借らむやうあ音の二音にその性質天造によりておのづか
ら大なる逕庭をなせりさてその五種の母音に何れよりせ
るも自由に發しうるものなりと雖動き顯はるゝ勢力に
はらあ音に在るをもてあ音を發語の先としう音の大に合
ふ聲質なるをもて衆聲の大元とするのみ

第二章 字原の分解及び五十字の組織

字原の眞圓形の内に正方形を置き線を十字にし其の圓心より離れたる圓形に達して圖を成したるものなり而して其の圓形は天に像り方形は地に像り線は又中心力に摸り縦横に畫したるものなりと言靈聲母古傳に見えたり是れ全く幾何の理に因りて畫したるものなり彼の横文の字原も是れに似たり悉曇の文字も亦斯の字原に出たるなりといふ各家説く所斯の如し是れ予の信を措く所に非きといへども今五十字の音訓を組織せるに當りて其のたよりよきを知る故に姑く之を假り以て其の圖を成せのみ又五十字排列の圖は世の人のぞる所異同一ならん是れ又各家主張の説のみ復標準とせるに足るものなし今更に定むる

所の圖は其の縦行は字原の線を欠き五種の文字となし之れを列ねて發音の口相大より小に及びて母音五種の位置を定む横行は圓形より出てたる文字を先きにし方形より出てたるを後にし其の響韻うに歸せるもの九字を父音の本位に定む而して其の母音の位置の文字と父音の本位の文字と相配して字を成したるもの三十六種之れを子字とし父母子合せて五十字を成せ其の大要あは字に始りるの字に終る天地の間萬物有るに即あるの義あり是れ造化の妙理なりされと五十音の順次は喩へは活物にして其の動作自在を有てる如し故に此順次をして將に規矩とせむに非きと雖其の組織の理をして觀易からむことを要とし則斯の圖を設けぬ

古の代字原解法及十五組字の織圖

方形の分解					圓形の分解							
方 形 の 分 解	五 個 と 十	字 の 分 解	し る 四	個 と 配	し て 子 字	十 六 と 成	個 と 配	し る 四	字 の 分 解	四 個 と 十	解 し る	圓 形 の 分
るあ	つあ	くあ	ぬあ	むあ	そあ	ふあ	おあ	卯あ	下あ	十あ	十あ	十あ
コ	タ	カ	ナ	マ	サ	ハ	バ	ア	下	十	十	十
るね	つね	くね	ぬね	むね	そね	ふね	おね	卯ね	下ね	十ね	十ね	十ね
コレ	タ	ケ	ネ	メ	セ	ハ	バ	ア	下	十	十	十
るい	つい	くい	ぬい	むい	そい	ふい	おい	卯い	下い	十い	十い	十い
コ	チ	キ	ニ	ミ	シ	ヒ	フ	イ	下	十	十	十
るれ	つれ	くれ	ぬれ	むれ	それ	ふれ	おれ	卯れ	下れ	十れ	十れ	十れ
コ	ト	レ	ノ	ミ	ソ	フ	フ	イ	下	十	十	十
るる	つ	く	ぬ	む	そ	ふ	お	卯	下	十	十	十
コ	ツ	ク	ヌ	ム	ソ	フ	フ	イ	下	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
方の右半形とると成そ	方の左半形とつと成そ	右矩形とくと成そ	左矩形とぬと成そ	全方形とむと成そ	上の弧とそと成そ	上の弧に方形四分の一と加へてふと成そ	下の弧の下に縦横線半減と加へておと成そ	全圓形と卯と成そ	下の弧の下に縦横線半減と加へておと成そ	圓形四個に分解して卯もふその四字と成し 方形五個に分解してむぬくつるの五字と成そ	十字五個に分解してあねいらの五字と成そ	十

第三章 卯えの位置

そもく大古のひふみ何等に基因し組織したるものなるや其の傳の明瞭なるを得されぬまつ其の説の姑く措く亦いろは四十七文字を綴りたるも序文に説く如く其の誰れ人たるを知らせと雖或は佛經若くは漢籍等を脩習したる人にして多くは支那文字の草跡及び梵字等を雜集し國語の音に假り之れを平假名とし四十七文字を編み尙支那の千字文の義を模したる如きものなり然るを本邦の通患にして徒に其の人を信したるの害より本辭の文字の足らざるを知るものなく遂に今の世に移り來りしものありさて佛語又漢語等を其の韻類に依りて審ふるに母音の五種を存せざるはなきを惟れぬ四十七字を定むるの際其の母

音をは捨てさりしものなりと知るに足れり故に今予か平
 假名を用ひて更に五十音を排列するに當りて其の四十七
 字の中より母音の字を採りあの縦行を定む即あゝいれう
 の文字是れなり又更に卯の字を假り之れを父字としわの
 縦行を定む即わゑるを卯の文字是れなり又更にえゝの二
 字を假り子音としやの縦行を定む即やえゝよゝの文字是
 れなりさて其の足らざるの三字を補ひ本辭五十字を全備
 し各其の音訓兩義を負はせ以てう卯ゑゝゝ等の其
 の義理の異なるを專明にせるなり學者之れを混愆せるこ
 と勿れ

第四章 五十字の音の組織

五十音の排列ハ全く人意に出てたる者にして易に所謂大
 衍の數五十とあるを基址とせり予かものしたるも亦之れ
 に基けりさて本圖を定むるに當りてまづ五音の起原を明
 にせむとせそもく五音ハ喉唇顎舌齦等の如きに出つる
 ものに非を其の本源ハ腦裡精神の運用に起因せるものな
 り喩へハ啞の發聲を習へるも教師其の形象を模擬し之れ
 をして啞の腦裡に感せしむ腦裡その力を起して直ちに口
 内に注射し振動して以て口相顯れ呼氣之れに乗して出つ
 即大氣に抗拒して發せるものは是れ其の音聲なり然りと雖
 其の腦裡の運用ハ無形にして最洪遠且至幽なりはた視る
 まど難けれハ企て、論せるも亦難し然れとも此の理を説

かされぬ人之れを知るに由なし故に茲に一二の譬ひを設けて之れを明にせむとせこゝに人あり其の修學に就かむとせらぬ勇氣の先進にして之れに腦裡の感動しぬるゝ其の勇氣に出てる動力なり其の學事を知らむとせらぬ智識の先進にして之れを腦裡に引き着くるものゝ其の智識に出てる引力なり其の學質を正さむとせらぬ正氣の先進にして之れを腦裡の正しぬるゝ其の正氣に出てる直なるものなり其の學業に勉めむとせらぬ愛憐の先進にして之れに腦裡の凝りぬるゝ其の愛憐に出てる凝力なり其の學術を修めむとせらぬ親和の先進にして之れを腦裡に和合せるゝ其の親和に出てる合力なり斯の理に因りて之れを修め而して忘れざるなり人々學藝を習ひ修むる

ことを得るゝ皆斯の如し則腦裡の運用にして其數の五種なるを明にせ又茲に妄人あり卒に憤怒の勢力を起し之れに乗して已れか愛玩せる器物を破毀し而して復忽然と其の所業を顧自之れを後悔せるに至るものありこゝ其の精神の中唯勇氣の一つのみ先進していまと智直愛親の四つものゝ協議を得せして偏倚に出てる所爲なり故に斯る妄行を爲しつゝ忽然と之れを顧慮し後悔に至るものなり乃彼の智直愛親なるもの各其の職を達せむとして其の勇氣に迫ること左の如し智の引力を以て其の協議を誘引し直に又正を以て其の不正を眞直に審し愛の則凝力を以て其の諫言に凝り親の合力を以て其の協議を和合し此れに依りて彼の勇氣の全く自己の妄行に出てる所業なり










と更に其の議決を採り之れを智直愛親に謝し今や初めて悔悟服罪の情態を顯しぬるに至れるなりこれ里言に後悔先にたゞせと云へり斯の如きも亦腦裡精神の運用にして其の数の五種なるを知るに足るなり而して其の五種なる精神に離れざるものにして先進後進の速なるその間に髮を容れざるなり是れ其の梗概にして又其の作用を分ちて之れを順次せれ一を勇とし二を智とし三を直とし四と五とと愛と親とを而して其の勇の動力を起し智の引力を起し直の純粹真直の正氣なり又愛の凝力を起し親の合力を起せなり而して其の發音せるに當りて口相を成せや動力の口内動き顯れて呼氣も亦動き出つ其の引力の成せ口相の下顯引き伸ひて呼氣の形象も亦引き出つ直の成せ口

相の真直に正しくして其の呼氣真直に出つ凝力の口相追々凝り集りて呼氣追々起り出つ合力の口相大いに合ひて呼氣も亦合ひ出つ而して五種の呼氣渾へて大氣に抗拒し發音を成し音波を傳へて以て其の耳底鼓膜に響く聞く者之れを普通母音と云ふ即あ[。]い[。]え[。]の單音是れなり而して其のう[。]音の發語論に述べたる如く複雑衆合の性質を保ちて衆聲の元宗なり而して其の合力の極の分力に變るる理に依りてう[。]聲より分れて九種の音を生せるもの[。]あ[。]い[。]え[。]に相配し以て生せる即切音三十六種普通の子音なり合ひて五十音となる其の排列の順次の前圖の如く[。]あ[。]に始まりて[。]に終る斯れ之れを真正の五十音と定むるものなりさて

此の眞正の五十音の抑造化主の幽傳に出てにし即天造にして管に本邦のみならず凡有らむ限り人類の土音なりされど大古の初め其の組織を殊にし支那の五十音皆反切に用ふる爲父母両音にう音を添へ洋洲の五十音中二音又三音宛合音にし母音のみ單音の儘を用ふこと言語學家の知る所なり然して其の基本と成せしもの皆此の眞正の五十音の外ならずるありさらては其の音數の足るべき理なし是れ造物者の人類に賦與せる所其の不公平なきを自知するに足る所以なり故に言語なるものにもうとせの雪霜を経せして五洲一定に歸せるものなるに列宿高く懸りて深淵透影に望む如し尙人智開け其の理を知るの秋至るに逢はぬ何ぞ難しとせへけむや茲に方針を降して可ならむ其

の審なるに宜しく圖に就きて之れを觀るへし
 但したてどの三音の其の約めたる音色させその半濁音に似たりされと國語に半濁音なし故に舊に依りたてどの音とを併せて之れを爰に説きぬ

五十字の音組織の圖

三つし偶配と音母と音父								
す	あふ	あゆ	あ卯	あ		あの口相の口裡動き顯れて呼氣動き出つ	動力	勇魂
す	けふ	けゆ	け卯	え		この口相の下唇引き伸ひて呼氣動き出つ	引力	智魂
す	いふ	いゆ	い卯	い		この口相の真直に正しくして呼氣真直に出つ	正直	直魂
す	たふ	たゆ	た卯	え		この口相の退き凝り集りて呼氣動き出つ	凝力	愛魂
す	ふ	ゆ	卯	う		この口相の大さく合ひて呼氣合ひ出つ	合力	親魂
				<p>此の口相あに開口し大より小に及びう音に至りて合口を此の純粹にして單音なる縦行と母音とし排列の順次の口相の大小に従ひて定む</p> <p>母音の中うの口相と成を体力の合力あり此の合力極りて分力と變るゝ理勢然るなり即分力の成を口相九種に分れ音階九種に分る此の單音なる横行と父音とし排列の順次の字原解法に依りて定む</p>		<p>精神作用と成せの直に體力と起して作用と成と即其の體力の作用と分ちて五種とぞ</p> <p>凡人も云はむとをるに當りての先精神感動と起して作用と成と即其の精神の作用と分ちて五種とぞ</p>		
と音の口相のそはみて呼氣摺れ出つ	ふ音の口相のふくれて呼氣觸れ出つ	ゆ音の口相のゆるやかにして呼氣揺れ出つ	卯音の口相の約にして唇の先少しく分れて呼氣分れ出つ					

五十字の音組織の圖

そ成と音子てめ切に音單と音合の此そ生と音の種六十三し偶配と音母と音父

ある	あつ	あくと	あぬ	あむ	あす	あふ	あを	あ卯	あ	あ	あ	あ	あ
ら	た	か	な	ま	さ	は	や	わ	あ		あ	あ	あ
る	つ	くと	ぬ	む	す	ふ	を	卯	い		い	い	い
れ	て	け	ね	め	せ	へ	え	ゑ	い		い	い	い
り	ち	き	に	み	し	ひ	み	ゐ	い		い	い	い
れる	たつ	たと	たぬ	たむ	たす	たふ	たを	た卯	え		え	え	え
ろ	と	こ	の	も	そ	ほ	よ	を	え		え	え	え
る	つ	く	ぬ	む	す	ふ	ゆ	卯	う		う	う	う
									う		う	う	う
るの口相ハ舌頭動きて呼氣はつみ出つ	くの口相ハ舌頭連りて呼氣強く出つ	くの口相ハ舌頭合ひて呼氣縁り出つ	ぬの口相ハ舌上ぬめらかに定りて呼氣脱け出つ	むの口相ハ唇と結ひて呼氣群れ集り出つ	そ音の口相ハ舌をほみて呼氣摺れ進み出つ	ふ音の口相ハ舌をふくめて呼氣觸れ出つ	を音の口相ハ舌をゆるりして呼氣揺れ出つ	卯音の口相ハ約にし七唇の先少しく分れて呼氣分れ出つ	あ	あ	あ	あ	あ

凡人もの云はむとそるに當りてハ先精神感動を起して作用と成そ即其の精神の作用と分ちて五種とそ

精神作用と成せり直に體力と起して作用と成そ即其の體力の作用と分ちて五種とそ

此の口相あに開口し大より小に及ひら音に至りて合口と此の純粹にして單音なる縦行と母音とし排列の順次ハ口相の大小に従ひて定む

母音の中ラの口相と成そ體力の合力あり此の合力極りて分力と變るハ理勢然るなり即分力の成そ口相九種に分れ音階九種に分る此の單音ある横行と父音とし排列の順次ハ字原解法に依りて定む

第五章 五十字の訓の組織

およそ文字にハ必音と訓との別有り天下の文字皆然り本
邦の文字何そ特に音訓の別無からむやされと古來其の別
を知るもの無し故に今將に之れを論せむとそ夫れ音ハ國
語におと云ふ凡宮商角徵羽天籟地響の起りて人の耳底
に止まるもの皆音なり即あけいおう又いろは大古のひふ
み等の類是れなり猶支那の伊の音ハ誠の音せいと呼ふ如
し單に其の音のみなり訓ハ國語に本つ辭と云ふ即あを解
くに動き顯るゝ義^うを解くに大きく合ふ義と云ふものは是
れなり猶支那の伊を解くに維也發語辭又誠を解くに審也
信也敬也と言ふ類の如し是れに由りて之れを觀れハ五十
音ハ即只音のみにして訓義に非ざるなり訓ハおのつから

其の義あるあり而して訓義を組織する其の本に立つもの
 二事あり二事と何そや口相呼象是れなり而して其の組
 織の理ハ猶支那六書轉注、諧聲、會意、指事、假借、形聲の法に據り訓義の形畫を
 成せし如し則口相一訓呼象一訓を成して毎字二訓を生じ
 父母の訓ハ其の各二訓を用ひ三十六子の訓ハ父の訓と母
 の訓と配偶して更に訓を生じ口相相應して一訓を成し呼
 象相應して一訓を成し渾へて一音二訓をなし父母子合ひ
 て一音二訓となるなり其の組織ハ猶五十音の父母配合して
 子の音を生じる法の如し而して其の一例を擧れハ漢字の
 文の義を糸の義に會意して紋の義をなし又水の義を皮の
 義に會意して波の義を成し言の兌に會意して説の義を成
 せ類の如し則以て其の義理を細説するなり尙其の事の詳

なるハ圖に著し



第六章 辭原

本圖を設けざるは訓義組織の圖の其の計畫の繁雜に亘るを以て之れを抜き出て其の活用す可き訓義のみを擧げ以て一圖を定め號けて辭原と云ふ是れ務めて一目瞭然觀易からむことを要する故なりし古事記の序文に本辭とあるは即此の辭原を云へり既に此の訓を以て詞類を釋するもの凡二千五百餘種みな証據焔灼にして其の理愈明なり又人に對して之れを説くに聽く者皆心のゆかざるはなし故に予ら新に發明せし所に於て之れを固有の辭原とせざるも牽強に非ざるへし此の辭原を知らせしめて國語を解く者の其の謬らざるものなりと希れなり今其の一例を擧ぐればしかの反しきと成るさして其のさをもて直に其の釋義

となき是れ其の義理を解くにあらき故に其のしかの義理
 に至りても亦何等の義なるを知るへからき噫有識士の患
 ふる所此に在り是れあに碌々委々を可けむや乃之れを世
 に公にせむとき凡文明の本を立て將智識の發育をなし又
 人道の蘊奥を知らむ等のことをして其の洪大の道に躊躇
 しむる階梯となさむものハ皆斯の音訓兩義組織の理に籠
 らざるものなし於戲大ひなるかな覽者請ふ斯の語を事と
 せハ則思ひ半に過ぎむ

辭原 五十音の訓義

ら	た	か	な	ま	さ	は	や	わ	あ										
行 <small>ゆ</small> き過 <small>あ</small> ぐる形 <small>かたち</small>	締 <small>ひ</small> り無 <small>な</small> く指 <small>さ</small> そ形 <small>かたち</small>	垂 <small>た</small> れ續 <small>つ</small> く	止 <small>と</small> まる	雜 <small>ま</small> る	失 <small>あ</small> る	成 <small>な</small> る	足 <small>あ</small> る	誠 <small>ま</small> く	中 <small>ち</small> 庸 <small>や</small> く退 <small>あ</small> る	若 <small>わ</small> く小 <small>こ</small> し	兩 <small>り</small> 方 <small>か</small> に巨 <small>こ</small> る	張 <small>は</small> り山 <small>や</small> ま進 <small>ま</small> る	遣 <small>や</small> り進 <small>ま</small> る	唇 <small>く</small> る	回 <small>ま</small> る	割 <small>わ</small> る	動 <small>う</small> る	動 <small>う</small> る	
れ	て	け	ね	め	せ	へ	え	ゑ	け										
嚴 <small>げん</small> しく當 <small>あ</small> つる形 <small>かたち</small>	彼 <small>か</small> れへ觸 <small>ふ</small> る形 <small>かたち</small>	通 <small>と</small> る	傳 <small>つ</small> る	撤 <small>さ</small> る	茂 <small>さ</small> る	退 <small>あ</small> る	柔 <small>な</small> る	内 <small>うち</small> へ	起 <small>お</small> こ	通 <small>と</small> る	手 <small>て</small> を	威 <small>い</small> に抑 <small>お</small> さ	屈 <small>く</small> る	協 <small>き</small> る	弱 <small>じ</small> る	形 <small>か</small> た	引 <small>ひ</small> く	引 <small>ひ</small> く	
り	ち	き	に	み	し	ひ	ひ	ゐ	い										
先 <small>ま</small> へ出 <small>で</small> づる形 <small>かたち</small>	眞 <small>ま</small> 直 <small>ち</small> に定 <small>さ</small> むる形 <small>かたち</small>	散 <small>ち</small> る	連 <small>れ</small> ん	遮 <small>さ</small> る	極 <small>き</small> む	明 <small>あ</small> る	照 <small>し</small> る	足 <small>あ</small> る	形 <small>か</small> た	彼 <small>か</small> れ	沈 <small>し</small> む	長 <small>ち</small> く	廣 <small>ひろ</small> く	運 <small>う</small> る	重 <small>じ</small> う	綽 <small>ち</small> やく	居 <small>い</small> る	眞 <small>ま</small> 直 <small>ち</small> に正 <small>せい</small> づる	眞 <small>ま</small> 直 <small>ち</small> に正 <small>せい</small> づる
ろ	ど	こ	の	も	う	ほ	よ	を	れ										
大 <small>おほ</small> く廣 <small>ひろ</small> る形 <small>かたち</small>	親 <small>お</small> み附 <small>つ</small> く	銳 <small>え</small> く	止 <small>と</small> まる	巨 <small>こ</small> る	細 <small>こ</small> る	礙 <small>あ</small> る	伸 <small>の</small> び	溢 <small>あ</small> る	一 <small>い</small> つ	添 <small>そ</small> る	短 <small>た</small> く	未 <small>ま</small> 確 <small>た</small> く	秀 <small>う</small> る	隔 <small>へ</small> る	密 <small>ひ</small> く	少 <small>す</small> く	長 <small>ち</small> く	追 <small>お</small> う	追 <small>お</small> う
る	つ	く	ぬ	む	す	ふ	お	卯	う										
却 <small>か</small> 合 <small>あ</small> み出 <small>で</small> づる形 <small>かたち</small>	活 <small>くわ</small> く	強 <small>か</small> く	連 <small>れ</small> ん	緑 <small>り</small> く	齒 <small>は</small> む	脱 <small>だ</small> る	滑 <small>な</small> る	昨 <small>あ</small> る	結 <small>む</small> す	磨 <small>あ</small> る	容 <small>ゆる</small> る	觸 <small>ふ</small> る	膨 <small>は</small> る	搖 <small>ゆ</small> る	緩 <small>ゆる</small> る	分 <small>わ</small> る	約 <small>あ</small> る	合 <small>あ</small> る	大 <small>おほ</small> く

第七章 反切に用ふる普通の五十音

前圖の五十音は父母兩音皆純粹の單音なり三十六子の音に至りて父母の兩音を配合して之れを切めたる音なり然れどもその發音せるに當りて單音の如くに出きを以て我か土音の性質とせ則前に圖したるは真正の五十音なり然るに中世西土文物東漸の際たるなほ方今世運進化の様の如くなりければ言詞も亦其の類を増しぬ則便に因り其の真正の五十音を改良して反切を用ふる一圖を畫したるものなり如何にとあれは其の作爲皆支那の韻鏡に出たるものなれはあり然して真正の五十音は其の父母兩音は純粹の單音にして之れを反切に用ふる事能はそ乃う音を借り之れを母字毎音の音頭に冠らせ又父音九字の音尾に

普通十五音の圖

父音と母音と相配して三十六の子音と生る

あ	あつ	あく	あぬ	あむ	あす	あふ	あゆ	あゆ	あう
ラ	タ	カ	ナ	マ	サ	ハ	ヤ	ワ	ア
い	いつ	いく	いぬ	いむ	いす	いふ	いゆ	いゆ	いう
リ	チ	キ	ニ	ミ	シ	ヒ	ト	フ	イ
う	うつ	うく	うぬ	うむ	うす	うふ	うゆ	うゆ	うう
ル	ツ	ク	ヌ	ム	ス	フ	ユ	フ	ウ
ゑ	ゑつ	ゑく	ゑぬ	ゑむ	ゑす	ゑふ	ゑゆ	ゑゆ	ゑう
レ	テ	ケ	チ	メ	セ	ヘ	ユ	エ	エ
ゑ	ゑつ	ゑく	ゑぬ	ゑむ	ゑす	ゑふ	ゑゆ	ゑゆ	ゑう
ハ	ト	コ	ノ	モ	ソ	ホ	コ	チ	オ

添へ以て五十音皆切音と成したるものなりさらば母音
 毎音うを借りて發せる理有らむや父音も亦うを添へ強ひ
 て長音に發せる理有らむやさて普通の五十音に片假名の
 字を用ふるは當りて字の冠りを缺き^イと^ウし之れをわ行の
 父字に置き兄の上の二畫を缺き^エと^オし又以の片を採り^ハ
 とし此の二字をや行の子字と定むるなり乃反切に用ふる
 普通の五十音を別に圖せ

第八章 跳音

本辭五十音中本跳音なし跳音ハ漢字の天乾山川等の類なり信禮著書の發情一家言に跳音の事を論して曰はく中世西土文字の傳はりし時和字を以て漢字を譯するに其の委員等相議して跳音に用ふる和音を初めて定むるに漢字三十韻なる上平の眞文元寒刪の類之れをなの縦行に収め下平の侵覃鹽咸の類之れをまの縦行に收む以て漢字を譯するは其の跳音代用文字の定則と爲せと云ふ然して國語に跳音を用ふるハ漢字の跳音に馴致し唯之れを習用せるのみ是れ決して跳音有るに非ざるなり國語の跳音に聞ゆる如きは皆音便にして其の用字ハま行な行の中に在るものなりさて世運進化して泰西の文字も傳播を乃便に因り

其の適當の跳音を作り之れを用ひて其の語を譯せるは固より妨害有る可からざるを雖今茲に國辭を説くに當りて因襲の説に泥み國語を綴るに強ひて跳音を用ふるは是れ大ひなる誤りなり則跳音使用の當否を論し其由來の原を明にして其の必用ふ可からざるの証を明にせ

第九章 言靈及び四聲

言靈と云ふは何ぞや音聲言詞は本神靈なしと知るをかく云ふは是れ他なし只言語の活用を稱するのみ今其の例証の一二を擧ぐれば橋箸端等に用ふるの字音皆はしなり又神上紙髮等の字音も皆かみなり筆の之れを書くに別文字なし音聲の之れを發するも亦然り他邦の人に示さむに此の音又此の書を以てせば師曠の聰と雖其の義理を辨識せること能はさらむ特に本邦の人能く之れを辨し箸橋神紙等の別を混愆せざるもの自然音聲に緩急の律呂を備へて然るあり故に其の妙を稱して言靈と云ひ又言靈の佐くる國といふあり然して歐米の語學はがのにを又動詞の種類を精密に極むと雖其の談話を爲せや手を用ひて

其の聲象を模擬し言語の活動を助く此の故に其の談話自
 晦澁不覺の患ひなし又支那の平上去入の四聲を以て專言
 語の勢ひを成し聲色を分ち緩急高低其の節度を調ふ若し
 四聲に依らそして言語を發しなれば聲音雜揉して通し難し
 是れ自然の理なり特に本邦の如きは只てにをは及ひ動詞
 の活用のみにして語法自正しく疾徐清濁適せざる所なし
 而してその言語明晰談話通暢聞く者満足せざるなし則之
 れを言靈と稱するは素より允當にして四聲高低に依る可
 き理なきを知るに足れり

辭礎終

- 平井則正先生著書八力齋藏版目次
- 本辭顯幽指圖 唐紙半切摺壹枚
 - 數語起原 全壹冊
 - 發明脚氣原因論 全壹冊
 - 發明脚氣病毒原論 全壹冊
 - 辭原 折本壹冊
 - 辭礎 全壹冊
 - 辭礎釋義 全壹冊

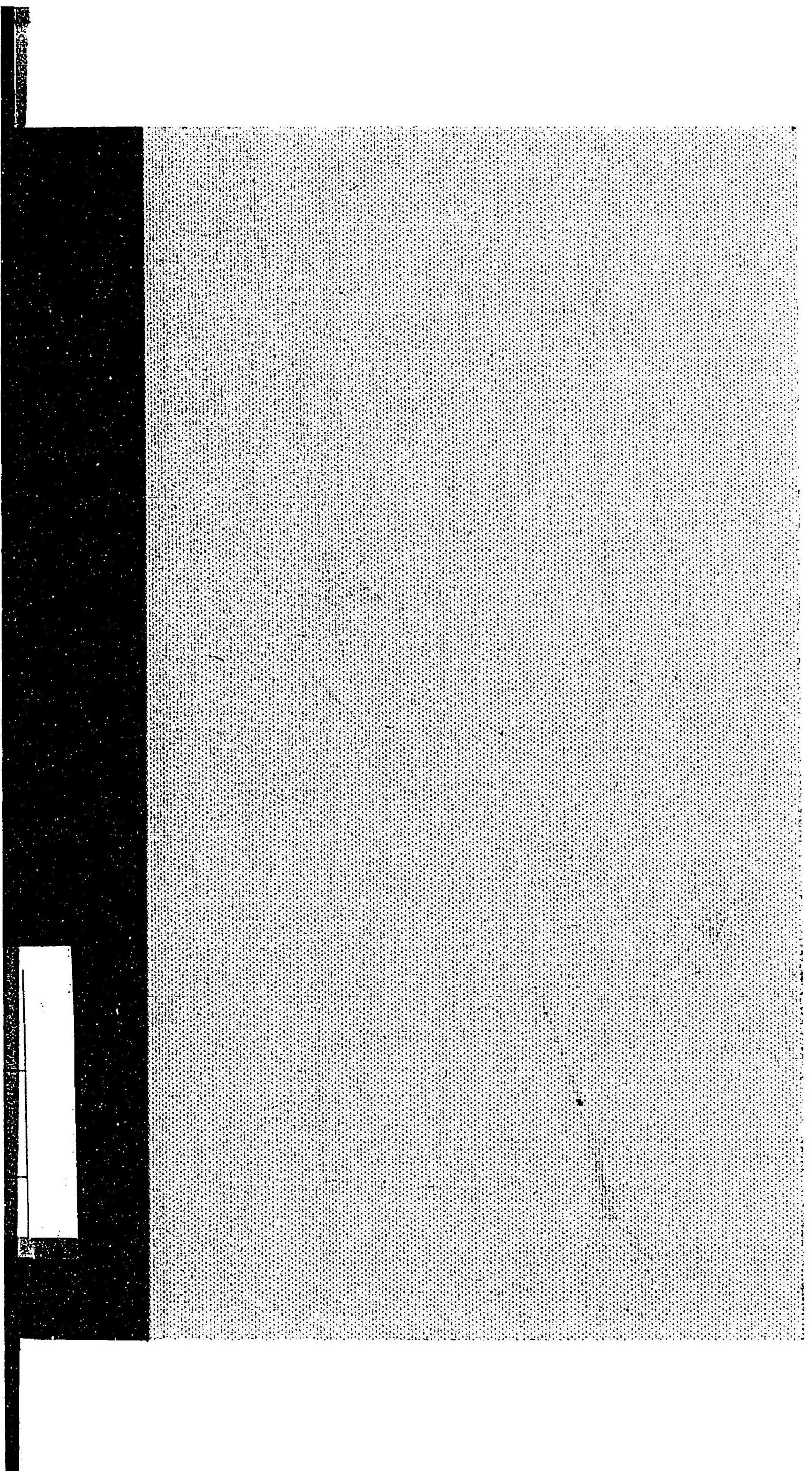
明治廿二年十二月廿七日印刷
 同年同月三十日出版



著述者 平井則正
 兼發行者 芝區今入町廿二番地
 印刷者 平井則正
 同區同町同番地
 賣捌所 吉川半七
 京橋區南傳馬町壹丁目
 十二番地

定價金三十錢

IT-3C-82



[Illegible text or label]

811.1
H475z

辞 礎
国立国会図書館

077172-000-0

811.1-H475z

辞礎

平井 則正/著

M22

DAC-0365

